

ケニア滞在記 1

京都大学工学部地球工学科国際コース 2 回生

山本 浩大

(1) ケニアは、遠い。

ケニアは、遠かった。行きも帰りもほぼ1日かかった。行きは、韓国、バンコクを経由で、帰りは韓国経由で、帰った。とにかく遠い。地理的には遠いが、ケニア滞在を終えて、ケニアに対す心理的な距離は、近くなった。ケニアのイメージといえば、広大な自然、〇〇族など、未開拓な地を思わせるようなイメージや政治的に不安定など、危険なイメージがあった。現地に行き、ヴィレジステイ、道直し、スラム訪問、孤児院等、色々な体験、現地の方からケニアについて、話を聞くうちに、いままで知らなかったケニアの姿を、身をもって知ることができた。以下、印象に残った体験、話などを書きたいと思う。

(2) ヴィレジステイと道直し

僕らは、エルドツレットのカブソーヤという村を訪問した。3泊4日、ステイした。到着した直後、村の長老に挨拶に行き歓迎を受け、気分が和んだ。受け入れ先のコミュニティーの名前は、FIST という。もともとは、異なる部族間の友好を深めることが目的で設立されたみたいだ。今は、道直しなどのプロジェクトも請け負っている。そんな人達とぶらぶらする。広大な空、赤い土、悪い道。ようやくケニアに来たという実感がわいた。雲が近く見える。ここは、標高2000mなのだから当たり前だ。朝と夜は冷えた。村に来て、ようやく地元料理を食べた。初日のお昼に、ウガリ、チャパティー、マナグなどを食べる。初め、現地の人にあわせて手で食べていたが、慣れていないので、手からボロボロこぼれ、食べにくかった。初日からいろんなところに連れて行ってもらった。町に行き、病院を見に行った。芝生があり、人々が座って話をしているのどかな所だ。エイズ患者が通う診療所もある。そこだけ、ほかの病棟とは離れていた。道端では、靴直しや靴磨きをやっている。道直しは2日目からだ。

道直しは、想像以上につかれる作業だった。土を掘り返す作業、土を土嚢袋に詰める作業、土嚢を運ぶ作業どれをとってもハードだ。土嚢袋は、重い。僕らが1つしか持てないのに、現地の方は、2つ持つ。2日目になると、適度にサボりたくなる。自

然と、人と話す時間が長くなる。現地の男の人たちは、すごくパワフルだ。全く疲れを感じさせず、作業をしている。

FIST の土木技師、ポールから、日本の道路はどうだ？ 日本で一番高い建物はなんだ？と作業中に、いろんな質問がくる。土嚢をもちながら、色んな人が話しかけてくれる。近くに小学校があるみたいで、お昼時になると大勢の子供達が、傍を通る。Hello! と手を握ってくる子から、笑って傍を通り過ぎるこまで様々だが、たいていフレンドリーに接してくれる。子供達にとってカメラが、珍しいらしく、写真を撮ってみせると、ものすごく嬉しそうにする。気のいい人達ばかりだ。ある男の人が、「俺におごらしてくれ」と、マンダジという三角形の揚げパンをおごってくれた。おいしかった。

道直しは、2日間。FIST の人達や現地の人達は、道を直すことの重要性を知っている。だからこそ、大人だけでなく子供まで道直しをしようとする。道直の近所のママは、本当にありがたいと言っていた。土嚢を使った道直しは、僕から見れば、地味でハードだ。しかし、道は、確実に治る。労働力も豊富だ。地元コミュニティーからちゃんと理解されている。道直しをする人達は、村のヒーロー達だった。

僕らは、現地の人の welcome な雰囲気に入れながら、思いがけず、色んな場所を回った。難聴を抱える子供たちが通う学校、精神的な病を抱える子供たちが通う学校、小さな動物園と博物館、バー、どれをとっても楽しい思い出。

(3) スラム訪問

予定では、ナイロビ・サウスランドのスラム地域に行くつもりだったのだが、治安が悪化しているということで、キャンセルになり、代わりに、マザレスラムに連れて行ってもらうことになった。スラム訪問は、マトマイニ孤児院の館長、菊本さんの手引きにより、実現した。スラムという未知な世界に行くことが楽しみだったので、嬉しかった。菊本さんの息子さんとそのスラムの青年団のリーダーのカマンデさんに案内してもらった。道中、いろんな話を聞く。「警察の下部の層の人たちは、スラムに住んでいる。それは、賃金が、スズメの涙ほどだからである。」「スラムで柔道を教えている。就職に有利だから。」本当に生のスラムの話だ。

タクシーを降りたのは、スラムを見渡せる丘だった。規模は思ったよりでかい。見渡す限りトタンの屋根が、広がっているといった感じだ。お昼時で、子供達がサッカー

一をしたりして、遊んでいる。みんな清潔な制服を着ていた。Chinese、空手、カンフー…と言葉を投げかけてくる。子供達は、僕らに対して興味津々だ。この丘をおりて、本格的にスラムに入る。しばらく歩くと、スラムが、ただの居住区でないことが分かる。一つの社会として機能している。レストラン、バー、出店などなんでもある。小さい学校もある。一番驚いたのは、映画館だ。携帯の普及率も高い。下水設備が整っておらず、ごみもあちこち散乱しているので、匂いがきつい。歩いていると、頭が少しふらふらしてきた。歩いていると、仰向けで倒れている人を見かけた。死人かと思ったが、酔っ払って倒れているだけらしい。よくある光景のようで、誰も構わない。スラムのお店でマンダジを食べた。おいしい。道にちょろちょろと水が流れている。その水は踏まないほうが良いと言われた。川はごみ捨て場らしい。ネズミ色をしていた。川岸にもごみは散乱しており、それを豚と鶏があさっている。スラムの子供達も、元気だ。僕らを見て、How are you?とリズムに乗せて近づいてくる。スラムにいる人たちはみな明るい。

現在カマンデさんはスラムを改善しようと動いている。丘の上には、美容師や電気工技師になるための職業訓練施設、図書館、ラジオ施設など、スラム出身者の社会進出を目指している。スラムは、様々な民族が、集まっている。普段は、仲よく生活しているが、選挙の時など、民族問題が政治的に出てくると、スラムに不穏な空気が流れるようだ。小高い丘が、スラムを分断している。それは、対立している民族の境界線らしい。修造さんによると、スラムは、人間のあらゆる部分が、さらけ出された場所だそうだ。人々は、底抜けに明るい。ただ闇の部分もある。それが、スラムだ。

(4) マトマイニにて

到着して降りたところは、森に囲まれた、のどかな所だった。森は、植林されたものらしい。夕方に着いたので、子供達は、学校からの帰宅途中だった。庭には、牛が二頭、番犬用のシェパード1匹、アヒル10数頭が歩いている。心が休まる場所だ。畑が、あり、有機農業で育てた野菜は、売ってお金にしている。畑には、にら、大根などの日本野菜から西洋野菜までたくさんある。ここは、ただの孤児院ではなく、地域のママさんたちの働き場でもある。ママさんたちは、フェルトのぬいぐるみを作っている。カラフルな動物の人形や、アクセサリーなど作っている。この商品は、人気商品で、ナイロビのホテルのお土産として、売られている。日本でも売られている。ママさん達は、近くのスラム出身者がほとんどだ。貧しい母親は、子供を育てること

ができない。そして孤児が増える。菊本さんの孤児ができる原因を、根絶から断ち切りたいという思いから、マトマイニは、ママさん達の職場を提供している。

子供達は、もちろん元気だ。一緒にサッカーをしたが、こっちがふらふらになるまで、やる羽目になった。生活は、健康的だ。起床時間は、5時30分。掃除をし、朝ごはんを食べ、学校に行く。夕方に帰ってきて、7時ごろ、晩御飯だ。ご飯前は、お祈りをする。食事後、しばらくして、自習時間となる。その後、就寝。

マトマイニは、平和な場所ではない。周りの治安が良くないらしい。PCや薪などを盗まれたこともあるらしい。マトマイニ孤児院は、社会的な役割を果たしている。ただの家ではない。菊本さんは、孤児院の母だけでなく、NPO法人 Save the children の代表も務めている。ぼくらが訪問した時、息子さんと娘さんが手伝いに来ていた。近くのケニア在住の日本人の方たちがボランティアで、フェルト人形をつくっている。それぞれが、今、子供達のためにできることをしていた。孤児院の卒業生たちが、マトマイニを支援する会を作っているらしい。孤児院には、将来のケニアの担い手であろう子供達と、ケニアの今の状況を何とかしようとしている人達がいた。

(小ネタコーナー)

(1) 村で、現地の人と寝た。

泊まった家は、独身の男の人の一人暮らし。ベットは、一つでした。夜は、蚊がでるので、蚊帳の中で、2人で寝ました。

(2) 道が…

とにかくひどい。車酔いの激しい人は10分に一回は吐くのではないのかとおもうほど。

(3) マサイ村

マサイの人とジャンプしてきました。

(4) お金が…

たいていのお土産屋さんは、話し合いで値段が決まる。それが楽しくて、お土産を買っていると、最終日、空港に向かうタクシーで、お金がたらなくなった。

(ギャラリー)

雨が降った後の道



食事（白いのがウガリ）



FIST と僕ら



スラムの子供達



マザレスラム



マトマイニでのフェアウェルパーティー



(完)